傾城水滸伝　第十二編ノ壱　曲亭馬琴著　歌川国安画
天保三年 壬 辰春正月吉日新板　江戸通油町書林鶴屋喜右衛門梓

▼：改頁　☆：未翻訳　□未校訂

さる程に大虫猛者平寅武は抜かんとしたる腰刀を矢庭に力寿に奪い取られて唐竹割りに斬り倒され、驚き騒ぐ供人らは立つ足も無く斬り散らされて薄手を負いつつ逃げ失せけり。節柴は初めより止めても止まらぬ力寿の短慮の事が早ここに及びしをようやくに押し鎮め、
「此の猛者平は国の守の新司綾重の親類にて、虎の威を借る非道の振る舞い。その憤りはさる事ながら、怒りに任して討ち果たせしは短慮の到り。是非に及ばず、さぁ此の所を立ち退いて江鎮泊へ帰りたまえ」と云うを力寿は聞きながら、
「宣う由は心得たれども、私がこの地を立ち去れば災い御身の上に及ばん。その儀は今更従い難し」と否むを節柴は押し返し、
「否、我が上は心安かれ。予ても伝え聞かれにけん。私は源氏の恩人なりし池の頼盛卿の子孫にて、頼朝卿の御時に永代不易の御行書をたまわりたる家柄なり。例え綾重がいかばかりに勢いを振るうとも、我が身につつがあるべからず。さぁさぁ立ち退きたまえかし」と言葉せわしく説きすすめて路用の金を取らせれば、力寿は遂に否みかね、身ごしらえしつ忙わしく近江路指して立ち去りけり。

かかりし程に大虫寅武の供人らは辛くも城内に逃げ帰り、寅武が討たれたる事の趣を斯様斯様と新司綾重に告げしかば、綾重は聞きつつ驚き怒って、時を移さず組子に下知して、藤原の正名の宿所へ遣わし、「寅武を斬り殺したる悪たれ女は云うにも及ばず、正名、節柴一人も漏らさず絡め捕れ」とぞ息巻きける。
これにより組子らは正名の宿所へ赴きけるに、節柴は早く出迎えて、
「主人の正名は去ぬる頃より病気によって身罷りたり。大虫殿の討たれしは斯様斯様の訳なれども、そを手に掛けし相手の女はその折に既に逐電して行方も知れぬをいかがわせん。しかりとも私のが事は池殿の子孫にて永代不易の御行書を家に伝えし者にしあれば、かばかりの事により国司の廳へ引かるべき者にてはあらずかし。さぁ立ち帰ってこれらの由を申したまえ」と陳ぜしを組子ら聞かず頭を振って、
「しかりとも本人を捕り逃がしては云い訳立たんや。云う由あれば国司の廳へ参ってこそ」と荒やかに早立ち掛かり手を引き立てて城内へ引きもて来て事しかじかと告げしかば、綾重やがて立ち出て息巻き猛く詮索す。その時節柴は
「彼の猛者平▼寅武が正名を割無く追い立てて屋敷を奪い取らんとしたるその事の始めより、正名は寅武に打ち悩まされし打ち身によって世を去りたる折から寅武が再び来て、屋敷を渡せと催促したる非道の振る舞い聞くに得耐えず、小力と呼ばれたる水仕女が立ち出て押しなだめんとしてけるを猛者平主は怒りに任して小力を斬らんとしたる刀をはかなく奪い取られて、小力に斬り倒されてそのまま息は絶え果てたる。事の紛れに小力は逐電して行方を知らず。正名は私の叔父にして元より由緒ある者なり。まして私は池の朝臣※頼盛卿の子孫にて源家に恩義の家柄なれば、いかばかりの咎ありとても七代まで許せとある頼朝将軍の御行書を家に伝えし者にはべり。この儀をもって

穏便の御計らいこそ願わしけれ」と云わせも果てず、綾重は眼を怒らし声振り立てて、
「例え頼盛の子孫にて源氏に恩ある者なりとも、当所は院の御領なれば鎌倉の差配を受けず。それのみならず陳ずる趣は甚だこれ胡乱なり。御行書あればさぁさぁ見せよ」と苛立つを節柴は
「然ればとよ。その御行書は携えはべらず。佐渡の宿所に有るなれば、取り持て来よとて供人を俄かに帰し遣わしたれども、道遠ければ未だ来ず。しばらく待たせたまえかし」と云えば綾重いよいよ怒って、「そは偽りにてあらんずらん。よしや御行書がありとても許さるべき咎にはあらず。しかるをここへ持て来ずして、佐渡の家に有りなんどと事を両端に云い紛らして逃れんと欲するとも、誰かはそれを真にせん。者ども早く節柴に縄を掛けよ」と激しき下知に「承りぬ」と組子どもは走り掛かりつ節柴をいとも厳しく縛めしを綾重下知してそのまま牢屋へ遣わし繋がせて、再び多勢を遣わして、正名の側女、その余の奴婢まで一人も余さず絡め捕らせて、そをしも牢屋に繋がせて、さて寅武の亡骸を引き取らせ葬って、由を都へ聞こえ上げ、寅武を斬り殺して逐電したる小力をも絡め捕って、その折に皆諸共に素頭を打ち落としてくれんずと残る方無く触れ示したる詮索大方ならざりける。

※朝臣（あそん）：三位以上の姓の下、四位の人の名の下に付けて敬意を表す 「源―頼政」。

〇さる程に力寿はしきりに道を急いで賤の砦に帰り来にければ、小蝶、大箱が扱って、篠芒朱良井と▼仲直りをさせんとて用意の座敷へ呼び寄せしに、力寿はちっとも会釈をせず空嘘ぶいて居たりしかば、朱良井は怒りに耐えかねて力寿をひどく罵りしを力寿も負けじと罵って、
「我らは彼の折、呉竹殿の指図によって本間の餓鬼めを隠せし事は隠せしかども、つつがもあらせず返せしに、執念く恨んで我一人の咎にせられる事やはある。恨みがあれども呉竹殿と大箱殿には云いはせで戯言吐くな」と云わせも果てず。朱良井はいよいよ急き立って、
「呉竹殿の指図でも彼の折に和女郎が情け無く和子を隠すにあらざりせば、咎無きこの身を暗くして、主に真を失わんや。その僻事を僻事と思わで詫びる気色も無く、私を狭み（見下す）する似非広言は堪忍ならず」と息巻いて、事いで来ぬべく見えしかば、呉竹、大箱、小蝶らは力寿を等しく叱り鎮めて、
「そなた一人の咎ならねども、心やりの為なれば朱良井殿に詫びよかし。そなたの為には年も勝って姉なる人に手を下げたりとて恥る事かわ。さぁさぁ詫びよ」と云われて力寿は否む由無く、しぶしぶ朱良井にうち向かい、
「我にちっとも過ち無ければ詫びべうは思わねども、姉御たちがとにかくに云われる由の黙止難さに十分負けて詫びるなり。許せ、許せ」と云いながら僅かに頭を下けしかば、皆々どっと笑いけり。
　これにはさしもの朱良井の恨みもようやく晴れしかば、小蝶、大箱らも喜んで、さらば朱良井、力寿らに仲直りの酒を酌ませんとて忠義堂に酒宴を設け、呉竹、稲妻諸共に一つ席に団居をさせて、仲直りの盃を取り結ばせる折から佐渡の国へ赴いたる夏女が帰り来る由、その聞こえありしかば、小蝶、大箱は聞きながらそのままここへ呼び入れけり。
　夏女が佐渡へ赴きしは元これ故ある事にして、力寿が残り留まって一人節柴ばかり居るならば、又、災いを引きいだす事もやあらんと大箱がしきりに危ぶみ思うにより、やがて小蝶と談合して力寿に意見を加えん為に早く夏女を遣わせしに、この時夏女は帰り来て小蝶、大箱に告げる様、
「私は佐渡の節柴の刀自許に赴きしに、節柴殿は叔父の病気を看取らん為に力寿を伴い、越前の

国府の町へ赴いたりと聞こえしかば、後を慕い彼処に至って対面せんと思いしに、思い掛け無く節柴殿は国司綾重に絡め捕られて、叔父正名の側女は更なり家内の者すら一人も漏らさず、全て牢屋に繋がれたり。その故は斯様斯様」と力寿が一時の怒りに任して、寅武を斬り殺したる事の元末を落ちも無く聞きつるままに告げしかば、小蝶、大箱、その余の者まで聞きつつ等しく驚きけり。

その時小蝶、大箱は力寿に▼向かって越前にてありつる事を尋ねるに、力寿は包むべくもあらねば、彼の寅武の非道の振る舞いは見聞きに耐えず、寅武の刀を奪って斬り殺したる事の趣を告げ知らせ、

「節柴殿の意見に任して、私は早く身を隠し道を急いでこの砦へ帰り来るに、思いきや節柴殿が巻き添いせられて牢屋に繋がれたまわんとは、その事の趣をとくにも告げんと思いしに、又、篠芒と口論起こって、その仲直りにうち紛れ、ついで悪さに云うべき事を云い遅れたるおぞましさよ。例え我が此の身一つなりとても又、越前へ赴いて節柴殿を救わずば勇婦と生まれし甲斐も無し」と云うを大箱押し止めて、

「無益の犠牲は片腹痛し。そなたは必ず行き先毎に災いをのみ引きいだすくたびれ者ぞ」とたしなめれば力寿は握れる拳を擦りつつ、

「そは宣わする事ながら、彼の寅武の大悪非道を仏に等しき者なりとも、おめおめとして見て居られんや。察したまえ」とつぶやけば小蝶はかかとあざ笑い、

「和女郎がかかる災いを引き出す事もあらんかとて、女韋駄天を遣わしたる春雨の刀自の先見こそ感ずるになお余りあるなれ。此の上は只速やかに越前の府へ押し寄せて、彼処の城を乗っ取って、節柴の刀自を救うべし。さぁ出陣の用意をせん」と逸るを大箱押し止めて、

「御身は砦の総大将にて、且つ姫上の後ろ見なれば、軽々しく出たまうべからず。私は先に節柴殿に受けたる恩があるなれば、及ばずながら諸々の勇婦たちを従えて綾重をこそ討ち取るべけれ。此の儀に任せたまえかし」と云うに小蝶は否みかね、その身は砦に残りけり。

〇さる程に大箱は早出陣の手配りして、桜戸、花的、秦名、琴樋、薄衣、筒鳥、早蕨、大鳥、山桃、飛子、涼風、白粉らを先陣と定め、その身は呉竹、朱良井、稲妻、夏女、力寿、横鯛、下貝、夏楊、岩飛葉らと共に後陣にあり。姫上並びに小蝶らに別れを告げて軍兵およそ五千余りで江鎮泊を進発し、越路を指して押し寄せけり。

さる程に足羽の新司綾重は大箱が多勢にて押し寄せ来ると伝え聞き、騒ぐ色無くあざ笑い、

「江鎮泊の賊婦ども、我れ日頃より討ち平らげて亀菊殿の恩賞にあずからんとこそ思いしに、自ら来ぬるは夏虫の火虫に似たる自業自得。城下まで寄せ付ければ皆殺しにしてくれんず」とて三千余りの兵を狩り集め手分けを定めて、自ら城より打っていずれば、寄せ手も既に近付いたり。互いの問答時こそ移れと先陣に進みたる寄せ手の大将虎の尾の桜戸は早くも馬を乗り進め、大薙刀をひらめかし、城の大将綾重の本陣目がけて討って掛かれば、綾重の左手の方より剃歌寸平太行道と呼ばれたる一人の勇士が馬を飛ばして桜戸を遮り留めて、互いに挑み戦う事は四五十太刀に及びしかば、行道遂に太刀筋乱れて敵し難く▼見えしかば、又、綾重の右手の方より寒敷葉九郎爪妙と呼ばれる勇士が馬に角入れ、馳せ出て、桜戸目掛けて討たんと進めば、又、各寄せ手の陣よりも迅雷秦名と名乗って馬上雄々しく大刀抜きかざして早爪妙と戦うたる。四人の大刀音、蹄の響き、いずれに暇無きものから、桜戸おめいて斬り込む薙刀にのつけに剃歌行道は腰の番を切り離されて馬より

落ちて死んでけり。
今この事の体たらくに驚き騒ぐ寒敷葉九郎は馬引き返して逃げんとせしを秦名はすかさずおっとおめいて振りひらめかす刃の冴えに水もたまらず、爪妙は細首、丁と討ち落とされて、骸も馬より落ちてけり。これにぞ勇む寄せ手の軍兵は鬨をどっと作りつつ、真一文字に駆け立てたる。
その中に女弓取花的は矢継ぎ早に差し詰め引き詰め、放つ矢先に空矢無ければ綾重の雑兵らは矢庭に数多射倒され総敗軍にならんとす。その時大将綾重はちっとも騒ぐ気色無く、馬上に剣を抜き持って口に秘文を唱えれば、怪しむべし忽然と一天俄かにかき曇り、山風激しく吹き荒れて、砂を飛ばし木を倒す勢い当たるべくもあらざれば、さしも勇みし寄せ手の大軍は面を向くべき様も無く、しどろになって悶着す。綾重得たりと諸軍を進めて駆け立て、駆け立て、討ち散らせば、大箱の先陣、後陣は早総崩れに崩れ騒いで三里余りも退きけり。綾重これを追い捨てて、静かに城に帰り入り、人馬の足を休めけり。
さる程に大箱は綾重の怪しき術に雑兵数多を討たせつつ、安からず思いしかば、呉竹を招き寄せて、しきりに軍議を凝らしけり。その時呉竹は膝を進めて、
「私は予て聞きし事あり。彼の足羽の新司綾重は亀菊の親類にて元は都の修験者なり。年十五六なりし頃に神隠しに逢って久しく帰らず、天狗に秘術を伝授せられて、怪しき技を成すと云えり。しかれども悪に與して、もし善人を損なえば災いその身に及ばんと教えし者が戒めたりと世の風聞に聞こえたり。かかれば重ねて手立てをもって、彼の邪術を挫けばうち勝たん事疑い無し」と云うに大箱喜んで、
「しからんには詮術あり。先に私が還路村にて天女の利益に会いし折、感得したる彼の天書に魔術を破る秘法あり。明日は必ず綾重の幻術を破るべし。斯様斯様にしたまえ」と手立てを示し下知を伝えて、次の日再び押し寄せれば、綾重も又、三千余りの軍兵を従えて、城をいで敵を▼迎えて両軍既に近付いたり。
その時寄せ手の陣中より、琴樋、薄衣、筒鳥、早蕨が味方を進め、馬乗り出して、無二無三に斬って掛かれば、城方の軍兵らはあしらいかねて見えたる折、足羽の新司綾重は蒼き旗の辺に馬を乗り据えて、鎧の上に浄衣を着て、手に宝剣を握り持ち、秘文を唱うる程こそあれ、黒雲たちまち立ち上り、風を起こして雨を降らせ、辺りも見えずなりしかば、大箱ここぞと馬乗り静めて彼の天女より授かりたる巻物に載せられし秘文をしばし唱えれば、綾重の幻術は遂に破れて行われず、雲治まり雨風止んで元の青空になりにけり。
寄せ手はこれに力を得て、等しく進んで攻め立てれども綾重は騒ぐ気色無く、再び剣を抜き持ってしきりに秘文を唱えれば、またまた黒雲群立って、雷、稲光おびたたしく天地も共に震動し、雷ひどく鳴りはためき、雲の内には夜叉天狗、異類異形の悪神が忽然と現れて、手に手に礫を打ち掛ければ、さしも勇みし寄せ手の軍兵も馬は恐れて跳ね落とし、人は驚き辟易し、立つ足も無く逃げ迷うを城の兵どっとおめいて当たるに任せて斬りたてれば、討たれる者ぞ多かりける。
しかれども大箱が天女より授かりたる▼彼の巻物には雨風の邪術を挫く法をのみ、只一行載せられて、その余の事は無かりしかば、大箱は今更に綾重の此の幻術を又、いかにとも詮術知らねば、したたかに討ちなされて、又、二里余り引き退き、ようやく野陣を取りたりけり。
しかれども幸いに只雑兵らが討たれしのみで、一方の大将たる勇婦は全てつつが無ければ、せめてもの事に思って、やがて軍師呉竹と再び敵を破るべき謀り事を談合するに呉竹は小首を傾けて、

「彼の綾重は大敵なり。彼奴が今日の戦いに青き旗を持たせしはこれ邪術を行う故なり。しかのみならずその手の者に三百人の神兵あり。その幻術に従ってよく駆け引きをする者なれば、力を持って討つ事難かり。思うに今宵綾重は勝ち戦の機に乗って、夜討ちをせんと謀るらめ。味方にそこらの備えを設けて、伏せ勢をもて討ち破らん。その謀り事は斯様斯様」とつぶさに囁き示すにぞ、大箱は斜めならず喜んで俄かに諸軍に機密を示し、さて山桃、白粉の両勇婦に一千五百の兵を従わせ、この夜の謀り事を説き示し、そのまま本陣をうち守らせ、大箱は二十人の勇婦らと諸共にその余の雑兵を引き連れて、密かにそこを発ち退き、十八九町東の方の山陰に陣を移して静まり返って居たりけり。

〇さる程に山桃、白粉は一千五百の兵に合図を定め手分けして陣屋の四方に伏せ置いて、綾重が押し寄せ来るを今か今かと待ちたりける。

されば又、足羽の新司綾重はその日城に帰って思う様、

「・・・・・大箱はひどく討ち負け、命からがら逃げたれば、人馬等しく疲れ果て、今宵は用心なおざりならん。いざさらば夜討ちをして大箱を討ち取るべし。者ども、夜討ちの用意をせよ」と忙わしく触れ知らせ、馬にはあくまで馬草を飼い、人には兵糧を使わせて、その夜密かに城を出て、丑三つの▼頃おいに大箱の本陣をひたひたと取り巻きたるその勢はおよそ一千余り。彼の三百人の神兵が綾重の馬の左右に在り、なれども、さう無く打ちもかからず、綾重はまた馬上にて例の秘文を唱えれば、たちまち雨風吹き荒れて黒白も分かずなりしかば、折こそ良けれと夜討ちの大勢、彼の三百人の神兵はなかんずく先に進んで鬨をどっと作りつつ、大箱の本陣をうち破り、込み入ってと見れば、人は一人もあらず、

「さては敵にも用心あり。謀り事に乗せられな」と皆声々に罵って走り去らんとする程に、たちまち伏せ勢前後に起こって、木の陰草の茂みより矢を射掛くる事は雨より繁く、ひるむ寄せ手を逃がすなと呼び張りつつおっとり込めて短兵急に攻め立てれば、寄せ手の軍兵驚き騒いで討たれる者少なからず。事急なれば綾重はまた幻術を行うべき暇もあらず、只一騎、馬を跳ばして逃げたりけり。

傾城水滸伝　第十二編ノ二　曲亭馬琴著　歌川国安画

その時雨止み風収まって有明の月がいでしかば、山桃は月影に逃げ行く綾重をきっと見て、弓引き絞り「ひゃう」と射る。矢壺違わず綾重は右の肩先を野深く射られて、馬より「だう」と落ちしかば、既に討たるべかりしを彼の神兵ら一両人が「あなや」と叫んで走り来て、早綾重を引き起こし、そのまま馬に助け乗せて城内指して逃げ失せけり。

この夜白粉も思いのままに分捕り込めて失せざる事無く討ち取る所の敵の雑兵は五百余人に及びけり。この勝ち戦の体たらくを人にて大箱に告げしかば、大箱は喜び、且つ怪しんで、

「ここと彼処は道の程、十八九町に過ぎざるに、此の所へは雨も降らず風の吹く事無かりしに、彼処へばかりの雨風が激しかりしは綾重のこれ幻術の致す所、侮り難しと舌を震って諸勇婦と諸共に

元の陣所に立ち帰り、その後忍びをもて綾重の矢傷の様子を密かに探り聞かせしに、その者やがて帰り来て、彼の矢傷は浅手ならねど、さしも急所に在らざれば辛くして死に到らず。をさをさ療治に手を尽くせば日を追って平癒すべし。彼が本復致すまでとて、籠城堅固に油断無くよくその門戸を守らせて、隙もあれば人を出して由を都へ聞こえ上げ、救いの軍兵を乞い申さんとて、そこらの用意もしつる」と云うを呉竹聞いて大箱に云う様、

「しからんには敵を城より出さぬ様、遠巻きにして一人も漏らすべからず。よしやこの後都より救いの軍兵は来ずもあれ、綾重の矢傷平癒せば、再び城より討って出て、又もや彼の幻術にて勝ちを取らんと▼計るなるべし。さればその術を破らん者は著の他に誰かあるべき。彼の刀自は去ぬる頃に大和の故郷へ帰りしより、今までも訪れ無し。先にも夏女を遣わされ、その住処をあちこちと尋ねさせたまいしかども、遂に得会わで帰り来にけり。此の度も夏女の刀自をもて、なお良く尋ねさせんには知れずと云う事あるべからず。これより他には詮方無し」と云うに大箱頷いて、

「その儀は真にしかるべし。夏女の刀自は大義ながらも早く大和へ赴いて、指神子の住処を尋ね、由を告げ伴って急いで帰り来たまえかし」と云われて夏女は一議に及ばず旅路の用意をする程に、力寿も共に行くべしとてしきりに乞うて止まざりしを大箱聞かず頭を振って、

「そなたはとかくに行く先毎に災いを引き出せば、夏女の刀自と諸共に大和へとては遣わし難し」と云うを力寿は押し返し、

「そは宣わする事ながら、節柴殿が捕らわれしは私の故ぞと聞こえしに、安然として此の所に日を送らんは本意にはべらず。夏女の刀自と諸共に大和へ行って指神子を尋ね出し、具し来て綾重を討ち滅ぼし、節柴殿を救い取らん。此の儀を許したまえかし」と云うを夏女は見返って、

「しからば御身は何事も私が教えに従って、肉を食べず酒を飲まず、よく精進潔斎※して、仮にも怒りを起こす事無く、只堪忍を旨とせば私は御身を具して行かん。いかにこの儀をよくするや」と云われて力寿は一議に及ばず、

「そはいと易き事なりかし。もしいささかでも背けば思いのままに計らいたまえ」と云うに大箱もようやく許して、夏女と共に遣わしけり。

※精進潔斎（しょうじんけっさい）：肉・魚の類を口にせず、飲酒・性行為などを避け、おこないを慎み、心身を清浄な状態におくこと。

かくて夏女は四つの甲馬を分かちて、二つはかたの如くに力寿の腿に繋がせて、さて大箱らに別れを告げて大和路指して発ちいでけり。夏女は元より仙術あって、日毎に八十里を行く奇特ありしを、力寿も甲馬を分けられて腿に繋ぎし事なれば、走る事は劣らず勝らず。次の日夏女と諸共に大和の睦田に着きしかば、ここは吉野山の麓にて著の宿所が此の里に在る由を予て聞きしかば、すなわち睦田に旅宿を求めて、なお又、著の宿所を問うに此の宿にても知る者無し。かくて夏女は明けの朝に再び力寿を伴って、あちこちと立ちいでつつ、あまねく人に尋ねれども著を知れる者無ければ、只徒に日を送る事は早四五日に及びけり。

　その時力寿は思う様、

「・・・・我この頃は肉を食べず、酒一滴も飲まざれば、骨離れ☆して耐え難し。今宵は密かに酒肴を求めて疲れを晴らすべし」と思案をしつつ、その夕暮れに宿の女にあつらえて酒肴を調え置かせ、夏女が早く寝入りたる寝息をうかがい立ち出て、勝手の方に赴いて彼の酒肴を取り寄せて思いのままに飲み食らい、やや十分に酔いしかば、値を問い銭を取らせて密かに臥所に入りにけり。

しかるに夏女はこれより先にふと目を覚まして辺りを見るに、力寿が臥所に在らざりければ心得難く思いつつ宿の下女らに問わんと思い起きてみれば勝手の次の間にて手酌に酒を飲みて居り。その膝の辺には真魚鰹の粕漬け、鮎の塩焼き、鼈の山椒炒り、三種四種を置き並べ、あくまでに飲み食らうを障子の暇よりとくと見て、呆れる事半時ばかり。彼女は誓いし精進禁酒を忘れて口を貪るよな。真に烏滸の女なり。懲らしてきっと戒むべしと思うものからこの夜は云わず、密かに臥所に▼帰り入り再び枕に着きしかば、力寿はかくとも知らざりけり。

〇かくてその次の朝に夏女は力寿にうち向かい、
「指神子の宿所の事は先にも来つつ尋ねしを、此の度はいよいよ残る隈無くかくまで漁りしに、知る由無きは不思議なり。今日は奈良の方へ行き、尋ねんとこそ思うなれ。さぁいでたまえ」と急がして、なお又、甲馬を二つに分かちて力寿の腿へ付ける時、結び様を異にして密かに呪文を唱えけり。

かくて力寿は夏女と共にやがて宿りを発ち出て奈良街道を指して行く程に、常にはあらで足が進んでしばらくも立ち止まられず、手水をせんと思えどもちっとも足が止まらねば、「此はそもいかに」と怪しみ思ってしばしはこらえたりけれども、下腹しきりに突っ張り返って漏りもしつべき様なれば、急に夏女に呼び掛けて事の趣を告げ知らせ、
「願うは早く此の甲馬を取り下ろしてたまえかし。手水をせんと思えども、ちっとも足が止まらねばいとも難儀にはべるかし」と詫びるを夏女はあざ笑い、
「その甲馬は途中にて取り除く事叶い難し。もし行く所へ行きも着かで甲馬を取れば祟りあり。そのまま居坐になるぞかし。もし立ち止まる事のならずば、ともかくもして手水をせよ。私は知らず」とつれも無く先へ進んで見返らねば、力寿はいよいよ詮術無くも歩きながらにだらだらと小便をしにければ、道行く人がこれを見て皆笑わずと云う事無し。

この日は奈良まで赴いて、しきりに著を尋ねしかども絶えて縁も無かりしかば、そこより又、引き返して睦田の方に赴く程に、力寿は物が欲しくなり、道の辺の飯を売る店へ立ち寄らんと欲すれども、只真つ直ぐにのみ足が進んで右へも左へも立ち寄る事叶わず、喉さえ渇いて苦しさに茶店へ寄らんと思えども、それすら心に任せねば、いとひどく飢え疲れて、絶えもしつべき心地して苦しき息をほっと吐き、再び夏女に由を告げてしきりに手立てを求めるにぞ、夏女はわざと眉をひそめて、
「それは不思議の事ぞかし。御身は誓いし事を忘れて、精進潔斎せざるによって、さる祟りがあるならめ。さぁさぁ懺悔をしたまえかし」と云われて力寿は驚き恐れて包むべくもあらざれば、昨夜密かに酒を飲み魚肉を食らいし事の趣を斯様斯様と懺悔して、「今後をきっと慎むべし。許したまえ」と手を擦って詫びれば夏女は心可笑しく、なおこの後を戒めて甲馬を結び直せしかば、力寿は進退自由になりけり。

この時日がなお高ければ夏女は睦田の旅宿に帰らず、吉野の辺へ赴いて、なおも著を尋ねんとて睦田川をうち渡れば、河原にうどんを売る家あり。ここにて腹を繕って、又、行くべしとて力寿と共に進み入り座を占めれば、後より来ぬる一人の老女がこれもうどんを食べんとて、夏女らと向かいて居り、うどんを打つを待つ程に、此の店の小女が後より来つつその老女にうどんを持て来

て据えにければ、力寿はたちまちむっとして、怒れる声を振り起こし、
「我らはここへ先に来て久しく待って居るものを、後より来ぬるあの婆に先へ食わせる法やある。人の銭でも我が銭でも銭に違いはあるまじきに、客選みをせられては堪忍ならず」と罵って、老婆に据えたる▼うどんの膳を引きたくって投げ付ければ、汁もうどんも散乱し汁注ぎの猪口は砕ける。
その時主人は走り来て、力寿をなだめて詫びる様、
「御腹立ちは道理なれども、いささかも客選みをして後先にしつるにあらず。あの御人は日毎日毎に吉野山へ赴いて烏有仙女羅衣様の御法談を聞きたまうが、必ずここへ立ち寄って中食の為にうどんを召される常得意で候なり。今日は常より時も遅れて急がせたまうべるめればとて☆、女がそこらを思い込んで漫ろに先へ参らせたり。許させたまえ」と詫びしかば夏女はこれを聞きながら、早くも思う由あれば力寿を叱り押し鎮め、その婆にも和睦をさせて早くも無事に収めしかば、小女は恐る恐るに再びうどんの膳をもて来て双方へ置き並べ、いざとて等しくすすめけり。
さる程にその老女は力寿の事の趣に肝を潰し呆れ惑って、身を縮ましてありける程に、早くも口舌が収まりしを喜びつ、夏女らに寄らず障らず挨拶して、共にうどんを食べにけり。
その時夏女は老女に向かって、
「聞くに御身は吉野山の烏有とやらん羅衣とやらんと呼ばれたまう山聖女の法談を日毎に聴聞したまうならずや。しからんには此の辺りに指神子著と云う女修験のある事をも必ず知って御座するならん。そもそも宿所は何処ぞや。我々東より遙々と来にけれど、宿所知らねば尋ねわびて徒に日を送りたり。教えてたべ」と他事も無く問われて老女は小首を傾け、
「問わせたまう著とやらんは芽葛殿の事なるべし。彼の人は去ぬる頃に他郷より立ち帰り、今は母御と諸共にその宿所へ居られるなり。著と云いしは幼な名にて、帰村の後は誰もかも芽葛の智者と呼びはべり。さるをなお、人は得知らぬ元の名をのみ聞き覚えて、著と尋ねたまいし故に労して功無く知れざるなり。又、我々が信じまつる烏有の聖女羅衣の山姫様は吉野山に御座します正真の生き菩薩、芽葛殿の師匠にて御座するが、日毎に麓の女を集えて長生きの術を説き示し、煩悩の垢を洗い除かせて真の道へ導きたまえば、私も日毎に講末に連なって聴聞注す☆。尊さ云うべくもはべらずかし。芽葛殿に会わんとならば、この里を山の方へ十町余り行きたまえば南の方に小道あり。そを又、十四五町入りたまえば字名を三ツ家と云う人里あり。只三軒の家のみなればやがて三ツ家と呼びなしたり。その三ツ家の中の家が芽葛殿の宿所なり。聞き過ちたまいそ」と懇ろに教え諭して身を起こし、▼別れを告げて吉野山を指して出て行きけり。
夏女は図らずもその老女の教えによって、今初めて著の宿所を聞き得にければ、喜ぶ事大方ならず、忙わしくうどんの値を主人に取らせて、その老婆と諸共に発ちいでしが、早く旅宿へ走り帰ってちとの土産を用意して聞きつるままに力寿と共に三ツ家の里へ赴いて、と見れば果たして此の所には只三軒の草の家あり。中なる家の造り様がただならず見えしかば、ここぞ著の宿所ならんと思えば、更に問うにしも及ばず、力寿を門に立たせ置き、一人門内に進み入って二声三声訪なう程に、著の母が奥より出て、「何処より」と問われるにぞ、夏女はすなわち慇懃に名を名乗り由を告げて、「著に対面せまく欲」と云うを著の母は聞きながら、
「そは又、折の悪かりき。著は去ぬる頃に行脚に出て宿所には在らずかし」と云うを夏女は押し返し、

「母御前、さのみな隠したまいそ。我々は娘御と義を結びたる姉妹なり。それのみならず大箱殿が頼まれる一大事あり。まげて対面させたまえ」と言葉を尽くして口説けども、主人の母は固く否んで会わすべくもあらざれば、夏女は争う由も無ければやがて門辺に立ち出て、力寿にかくと告げ知らせ、

「今こそ御身を用いる事あれ。斯様斯様にせよかし」と言葉せわしく囁き示せば、力寿は頷き斧携えて、そのまま内に進み入り、「著に会わん」と呼ばわりければ、主人の母は驚きながら再び奥より立ち出て、

「誰様かは知らずはべれど、著は去ぬる頃に行脚に出て宿所に居らぬをいかがわせん。さぁさぁ出て行きたまいね」と云うを力寿は聞きながら眼を怒らし声苛立てて、

「否、この婆が白々しく隠せばとても真にせんや。なお偽って会わせずば、主人の親でも用捨はせず。これを手本に覚悟をせよ」と云うより早く斧振り上げて、庭に有り合う麦突き臼を只一打ちに打ち砕けば、主人の母は「あなや」と叫んで驚き恐れ腰うち抜かし、しばしは起きも得ざりけり。

その時著は奥の方より、「無礼をすな」と声をかけ、慌てて出て来にければ、夏女も内へ進み入り著に向かってうやうやしく、

「絶えて久しや、著の刀自。我々は大箱殿の指図によって迎えに来つれど、親御が隠させたまう故に力寿の無礼は止む事を得ず、御身をおびき出さん為なり。許したまえ」と詫びつつも主人の母を助け起こして塵うち払いいたわるにぞ、著も今は逃れる道無く、

「しからばいずれも此方へ」と客座敷に伴って、茶をすすめ菓子をすすめて、いと懇ろにもてなしければ、夏女も又、もたらしたる土産を贈り来意を告げて、先にも来つつ尋ねし事、此の度も尋ねわびし事、さて大箱が節柴を救わん為に戦を起こして新司綾重の越前の国府の城を攻めると云えども、綾重は元より幻術あれば滅ぼし難き事の趣をいともつぶさに物語りして、

「いかで御身を呼び迎えて、彼の綾重の幻術を挫かざれば▼勝つ事難かり。願うは我らと諸共にさぁ越前へ赴いて春雨の刀自に力を合わせ仇を滅ぼしたまえかし」と言葉を尽くして説き進めしを著は聞かず頭を振って、

「そは易からぬ事ながら、私の母が年寄りたるを振り捨てては出て行き難し。それのみならず、我が師と頼む羅衣の山仙女が一日も離したまわねば、日毎に彼処へ赴いて仕えまつれる我が身にはべる。師の許しを受けざれば何方へも赴き難し。かかる障りがあるなれば、心に任せぬ事にこそ」と否むを夏女は押し返して、口説きたてつつ請い求めるを著もさのみは否みかね、

「しからば明日、吉野山の庵室へ同道し、我が師に由を告げ知らせ、去ねと云われば望みに任せん。もし又、無用と云われれば、師の言葉には背き難かり。その折は恨みたまうな」と云うに夏女は覚束なくも遂にその儀に任せけり。かくて著は夏女らを宿所に留めて、小夜更くるまで彼の戦いの事の趣、江鎮泊の事さえに聞きつつ語らい明かしけり。

〇さる程にその明けの朝、夏女、力寿はしきりに逸って吉野へ行かんと云いけるを著はなおも押し止め、

「我が師の仙女は朝務めあり。又、昼よりは説法して遠近人に聞かせたまえば、そこらの業の果てし頃に私が案内をしはべらん。しばし待たせたまえ」とて、その日未きの時過ぎて、夏女、力寿を伴って吉野山に分け上り、烏有仙女羅衣の庵へやがて来にければ説法は既に果てて陽炎、糸遊と呼

ばれたる只二人の女の童のみ端近く居たりけり。
　その時著は夏女、力寿を後に付かして仙女の辺へ参りつつ、
「江鎮泊の大箱が恩人節柴を救い取らんとて越前の国府を攻めけるに、彼処の城の大将は新司綾重と呼ばれる者にて幻術をさえ良く行なえば、遂には勝ちを取る事難かり。これによりいかで私を呼び迎え、彼の綾重の幻術を破らんと欲する由をその手の勇婦夏女らをもて頼み遣わしたりけれども、老いたる親を残し置き遠くいでんはさすがにて、幾度か否みはべりかども生憎に請い求めて止まざりければ、黙止難く師の御旨を伺わん為にすなわち召し連れはべりにき。いかが計らいはべらんや」と問えば夏女も膝を進めて、
「願うは尊師、著殿をしばらく貸させたまえかし。これ仮初めの事ならず。三世姫の御為に小蝶、大箱らを始めとして数にもあらぬ我々まで尽くす真を思い汲み、許させたまえ」と請い願うを仙女は聞きつつ頭を振って、
「そはいと難儀にあるべけれども、著はしばしも手離し難し。先には彼女が三世姫を救い取り参らせんとて漫ろに出て帰らざりしを要無き業と思いしに、久しくして帰り来にけるを又、何処へか放ちやるべき。まいて年老いたる一人の親あり。親に物を思わせて遠く去らんは不孝なり。これかれもって許し難し。思い掛け無き事にこそ」と云われて夏女は望みを失い、▼なおかにかくとかき口説けども烏有仙女は露ばかりも聞き入るべくもあらざれば、著は二人に目を配り先へ立たして別れを告げて、夏女、力寿を伴って三ツ家の宿所へ帰りけり。

〇されば夏女は本意無くも著の宿所に帰りしかども、さて止むべきにあらざれば、又、これかれと談合して、
「よしや仙女の心強くて願いを聞き入れたまわずとて、このまま越路へ帰られんや。明日はつとめて庵に至って、なお幾度も願うべし」と云うを著は慰めて、
「御身の当惑道理なり。明日も彼処へ伴い行かん。今宵はまず早寝まり☆たまえ」と云うに夏女は覚束無くも今宵もここに留まって早く枕に着きにけり。

〇さる程にその夜さりに力寿も臥所に入りたるが、臥しつつ一人心に思う様、
「・・・・あの羅衣とやらん、烏有とやらんと呼ばれたる山姫女が物々しげに著を手離し遣る事ならぬなんどと大束に我が物めかせし面の憎さよ。仙女でもあれ菩薩でもあれ、彼奴一人におとしめられて、おめおめとして帰られんや。今宵密かに彼処に至って、早く彼奴を押し片付ければ、他には著を止める者無し。否でも応でも伴ってとく越前へ帰り行く、近道これにますもの無し」と心一つに思案をしつつ、そのまま密かに起き出て、手慣れし斧を引き下げて早背戸口より忍び出て、山路にたゆまぬ勇婦の魂、足に任せて走りつつ、仙女の庵へ近づく程に夜は丑三つにぞなりにける。
　かくて力寿は垣を潜って庵の内に忍び入り、奥の様子をうかがえば、烏有仙女は未だ眠らずに灯火の影明らかにて経読む声が聞こえしかば、抜き足しつつ近づいて障子の隙よりとくと見て、たちまち障子を蹴放って斧ひらめかし走り掛かるを、仙女は騒ぐ気色も無く、見返る所を「おつ」とおめいて只一打ちにうち倒せば、哀れむべし烏有仙女は唐竹割りにつんざかれて白き血だくだくと流れ出てたちまち息は絶えにけり。
　力寿はこれをとくと見て、

「此の山女の血潮の白きは霞を飲み露をねぶって、五穀を食わざる故にかかる奇特が有るならん。かく行うて老せぬ者も心素直に持たざれば、我が此の斧を身に受けて、玉の緒ここに絶え果てたり。心地良し、心地良し」と一人語ちつつ斧引き下げて走りいでんとする程に、彼の女の童は陽炎が驚き覚めけん起きて来て、今此の事の体たらくに「あなや」と叫んで逃げんとせしを力寿は再び斧振り上げて、水もたまらず斬り倒し、そのまま庵を走り出て、跳ぶが如くに三ツ家の宿へ走り帰って忍び入り、やがて枕に就きけるを知る者絶えて無かりけり。

〇かくてその夜は明け離れ、朝飯を果たすとそのまま▼夏女は著を急がし立てて、力寿と共に今日も又、仙女に願い申さんとて庵を指して赴くにぞ、力寿は一人可笑しく思って、
あの山女は昨夜我が斧にて埒を明けたるに、今更誰に願わんやと思うものから打ち明けて人に告ぐべき事ならねば、又、著らの後に付いて吉野の庵へ赴きけり。さる程に指神子著は夏女らを伴って庵に至って音なえば、烏有仙女は朝の務めを仕果てて奥に居たまいけり。力寿は早くこれを見て、肝を潰して眼を見張り、腹の内に思う様、
「・・・・あの仙女は昨夜、我が唐竹割りに斬り倒せしに、身にはちっとも傷付かず、つつがも無きはいかにぞや。それのみならず、又、一人の女の童をも手に掛けしに彼奴も死なず今なお在り。不思議、不思議」とばかりに思う心を得は云わぬ、迷いはいとど晴れざりけり。とは露ばかりも知る由無き夏女は仙女にうち向かい、うやうやしく額を突き、
「昨日も申せし事ながら、著殿を貸したまわねば戦の難儀は云うもはべらず、大箱がさぞ待ちわびて居らんと思えば、我々までも安き心ははべらずかし。まげて許させたまえかし」と願うを仙女は聞きながら、
「其文字（そなた）の願事、真に切なり。そこに居る同道の女中は何と云う者ぞ」と問われて夏女は後辺を見返り、
「彼女は旋風力寿と呼ばれし江鎮泊の勇婦なり。此の度大箱に従って陣中にはべりしを相伴って参りにき」と云えば仙女は頷いて、
「さぞあらん、さぞあらん。よしや幾度願われるとも、著をやらじと思いしかども、あの力寿とやらんの心様が賞すべき由あるをもて、許して越路へ遣わすなり。かくては早く伴って彼処へ帰りやらんと思えば、飛行の術にますもの無し。まずその仕方を見せはべらん。いでいで」と云いつつも早身を起こし先に進んでそのまま庭に立ち出れば、著は更なり夏女、力寿も後に付いてぞ下り立ちける。
　その時仙女は陽炎と糸遊に云い付けて三色の布を取り寄せて、その中の白き布を石の上に開き敷き、著を布の上に乗せ、しばし呪文を唱える程に著は布の切れと共に中空に吹き上げられて、雲の内にぞ立ちにける。かくて仙女は手を上げて、招くに従いひらひらと著は布と諸共に下って庭にぞ立ちたりける。さてその次には赤い布を石の上に開き乗せ、それには夏女をうち立たし、再び呪文を唱えれば夏女も又、空中にひらひらとうち上っていとも小さく見えにけり。かくて夏女も下って来つ。
　又、その次には力寿をとて、黒き布を取り出して石の上に押し開き、力寿を布の上に立たして、またまた呪文を唱えれば、力寿も布と諸共に早空宙へ上りしが久しくなるまで下ろされず、布はしきりにひらひらとひらめきつつうち巡って、目眩き魂消えて危うさ云うべうもあらざれば、力寿は

驚き声を立て、「仙女、私を下ろしたまえ。やよ、さぁさぁ」と叫びしを烏有仙女は仰ぎ見て、
「烏滸なる事を云う者かな。和女郎は昨夜忍び来て、斧にて我が身を斬り殺し、又、陽炎をも害したり。我もしその機を察せずば、遂に和女郎の手に死なん。知らずや和女郎が斬り倒せしは我が身に▼あらず、陽炎にもあらず。酒を盛りたる瓢なり。疑わしくばあれを見よ。陽炎、糸遊、瓢を出して、さぁさぁ見せよ」と急がせば、女の童らは心得て、斬り裂かれたる二つの瓢を取り出し来て指し示せば、力寿は更なり著、夏女は初めて悟る力寿の悪心に故ありけりと驚き恐れて、言葉等しく詫びにけり。その時仙女は昨夜力寿が忍び来る体たらく、彼女の心は仙女を殺して著を容易く具して行かんと思いぬる旨の巧みを鏡に照らして見つるが如く説き示された夏女らは片腹痛く今更に詫びるに由も無きものから、力寿の為に言葉を尽くして悲しみ乞うて止まざりけり。

　されば力寿は仙術の奇特にひたすら後悔して、苦しき声を振り絞り、
「やよ、なう、尊師許したまえ。昨夜は一時の出来心にて御身を失わんと目論見しを今さら後悔しはべるのみ。許させたまえ」とうち詫びれば仙女は聞かず笑いつつ、
「否々、今は許し難し。四五日の程は辛き目見せて、きとこの後を懲らすべし。覚悟をせよ」とたしなめて再び呪文を唱える程に、葛木の山の神が忽然と現れ出て、颯と吹く風と諸共に力寿をむずとかい掴み、何地ともなく飛び去りけり。

　著、夏女はこの有様に再びひどく驚き恐れて言葉等しく詫びしかば、仙女はこれを慰めて、
「否、いささかも苦しからず。彼女は愚直の女なれども、元より心に邪無し。私を討たんと欲せしも、つまる所は著を容易く陣中へ伴って、仇を滅ぼし節柴を救い取らんと思うにあり。かかればこれ忠なり義なり。人を殺して財を奪う盗賊の行いと非を同じくして語るべからず。さりとても又、戒めずば又、災いを引き出さん。しばらく懲らして良き頃に許してここへ呼び取るべきに、夏女殿はなお四五日は著の宿所に逗留して、力寿が来ぬるを待ちたまえ」と云われて喜ぶ、著、夏女はようやく心を安くして烏有仙女の道徳を世に有り難しと感じけり。

〇されば力寿は思い掛け無く山の神にかきさらわれて、雲を分けつつ走る程に、同国郡山の城内へ、たちまちだうと投げ落とされて、しばしも起きも得ざりけり。この時郡山の城の大将大和の判官正主は司人らを従えて問注所に出座あり。領分の民の訴えを聞き定めんとする程に、怪しむべし空宙より局の辺へどっさりと地を響かして落ちたるものあり。思い掛け無き事なれば、正主を始めとして誰か驚き怪しまざるべき。「此はそもいかに」とばかりに走り集いつ眼を定めて皆々等しくこれを見るに、色黒く骨たくましくひどく▼肥えたる大女が只今空より降りたるなり。「そも何者にてあらんずらん、不思議不思議」とばかりに評議まちまちなりけるを判官正主は押し止め、
「察するに此の女は魔術を行う者にして、忍び入らんと欲する故に空を駆けて来る程に、漫ろに雲を踏み外し、ここへ落ちたる者なるべし。さぁさぁ厳しく縄を掛け、しばらく牢屋に繋ぎ置くべし。しかれども術をもて逃げ去る事もありぬべし。総て幻術を行う奴に汚れた物を降り注げばその術破れて行われずと予て聞いたる事しもあれば、そこらの用意もさぁさぁ」と下知に従う雑兵らは力寿を厳しく縛めて、早肥桶をもたげ来て、いと大きなる柄杓をもて力寿の百会の辺りより下肥を多く降り注げば、目とも云わず口とも云わず、力寿は身の内残るかた無く肥にまみれて、ようやくに人心地は着いたれども、既に厳しく縛められたる我が身を怪しむばかりにて云い解く事も許されじと思いにければ、口をつぐんでおめおめとしていたりける。

さて雑兵らは思いのままに力寿に肥を降り注ぎ、やがて牢屋へ遣わしければ獄卒らが受け取って怪しむ事大方ならず、
「聞くに神世の古には火の雨が降ると云えども、空より女の降りたる事はこれ未曾有の珍事なり。これは必ず吉野山の烏有仙女の弟子なるべし。もししからずば塔之峯の女天狗であらんずらん。取りな逃がしそ」と罵るを力寿は聞きつつ、心に可笑しく思えばたちまち出鱈目に獄卒らに告げる様、
「察しの如く私の事は葛木の神に仕われる女仙人なりけれども、いささか犯せる罪あって、しばしここらへ放たれたり。なれども遠からず▼許されて元の御山へ帰るべし。和主らは私に良く当たれば、その報いとして福を授けん。もし又、惨くもてなせば、我が此の所を立ち去る時に一人も漏らさず蹴殺すべし。この儀を良く良く思いねかし」と脅せば皆々驚き恐れて忍び忍びに談合しつつ、力寿の身内にへばり付きたる下肥を洗い流して、新しき着る物を持て来て、やがて着替えさせ、三度の膳にも心を用いて、これより日毎に酒をすすめ肴を物して、代わる代わるにもてなす事が大方ならねば、力寿は牢屋の内に在れどもいささかも苦痛を受けず、あくまでに飲み食らいして、三日四日と日を送りけり。

傾城水滸伝　第十二編ノ三　曲亭馬琴著　歌川国安画

烏有仙女羅衣の仙罰☆にて力寿が山の神にさらわれて行方も知らず成りしより、早六七日を経にければ夏女は著と諸共に吉野山の羅衣の仙室に赴いて力寿の為に詫び言しつつ、
「願うは彼女を許し返して、著の刀自を貸したまえ。今頃は大箱がさぞ待ちわびて在るべきに、安否の程も心元無し。まげて許させたまいね」と繰り返しつつ口説きしかば、羅衣は聞きつつ頷いて、
「先にも既に示せし如く、力寿は手荒き女なれども、又、素直なる所あり。邪を成す者にあらねば真に彼女を憎むにあらず。しばらくその非を戒めて懲らさんとのみ思いしに、既にして日頃を経たり。今は良き頃なるべきに、いで呼び返して参らせん」と答えて窓を押し開き、大空を仰ぎ見て呪文を唱えたまいけり。しばらくして空中より、此の仙室の庭面へたちまち「だう」と落ちる物あり。夏女は響きに驚いて著と共に出て見るに、これすなわち余の人ならず旋風力寿なりければ、これはこれはとばかりに驚いて、且つ喜んで、そのまま内に助け入れて事の様子を尋ねれば、力寿は思わず大息付いて、去ぬる日神にかきさらわれて大和の判官の問注所の局の辺へ落とされたるその事の始めより、むさき物を注ぎ掛けられて牢屋に繋がれし事の趣、獄者らを欺き脅して呵責を逃れしのみならず、日毎に彼らの馳走を受けて飲み食らいせし事までつぶさに告げて、又、云う様、
「今日は牢屋に我が身一人でいと徒然でありけるに、恐ろしげなる金剛力士が牢屋の窓より飛び入って、私を▼矢庭にかい掴み、格子の隙よりつと出て雲に乗りつつ走りしが、その後の事は覚えず、ここの庇へ下ろされけん。それから庭へ落ちたるが、幸いにして怪我もせず、不思議の事にあらずや」と云うを著は笑いつつ、
「その儀は全て我が師の仙術。しばらく和女郎を懲らさんとて、しか計らわせたまいしなり。この後とても慎まずば悔やむとも及ばんや。早く仙女に見参して、お詫びを申したまいねかし」と夏女諸共説き示せば力寿はいよいよ驚き恐れて仙女の辺へ参りつつ、身の過ちを詫びにけり。

その時烏有仙女は夏女を招き近づけて、
「先にも固く否みし如く、著は離ちやり難けれども和女郎の懇望は黙止難く、又、此の著も大箱らと宿世の因縁免れずに再び一つに集まるべき者にしあれば、その意に任してしばらく放ち遣わすなり。此の儀をよくよく思うべし」と示して著を招き近づけ、
「只今示せし訳なれば、そなたは越路へ赴くべし。明日よりして母御の事は我が身が宜しく心を付けて、ともかくもして在らしめん。そなたは功成り名を遂げれば、早くこの地に帰り来よ。これまでそなたに教えたる仙術は多かれども、皆世の常の技にして彼の新司綾重の邪術を挫くに足るべからず。よって五雷天心の正法を授けるなり。これをもて大箱を助けて、仇を滅ぼすべし」と懇ろに諭し示して秘書一巻きを授けたまえば、著はうやうやしく請け戴いて、夏女、力寿ら諸共に喜びを述べ別れを告げて、やがて宿所に立ち帰り、さて母親にしかじかと事の由を告げ知らせて旅装いを調えけり。
著は親の時よりして、ちとの田畑ありければ衣食に乏しき事も無し。ここをもて母も又、切には留めずに心を得て、夏女、力寿をもてなしけり。▼かくてその明けの朝、著は母親に別れを告げて、夏女、力寿に伴われて越路を指して急ぐ程に、次の日夏女は著に向かって、
「私は先へ走り帰って、御身の事を春雨の刀自らに早く告げ知らせ、又、立ち戻って出迎えん。この儀はいかが」と語らえば著は聞いて一議に及ばず、
「その儀は真にしかるべし。彼処にも、さぞ待ちわびてありなんものを。さぁさぁ」と云うに夏女は力寿を見返り、
「和女郎、今日より私に代わって指神子によく仕えよ。著の刀自にはその仙術が師の羅衣の仙女にも劣らぬ手並みが有るなれば、もし露ばかりも怠りあればまたまたひどい咎めに会わん。その度は私も又、きっと思い知らすべし。心得たまえ」と戒めるを力寿は聞きつつ頭を掻いて、
「その儀は心易かるべし。先には御身に痛く懲らされ、その後も烏有仙女にえら酷き目に会わされしに、今更何をか怠るべき。さぁさぁ行かせたまえかし」と云うに夏女は「さもこそ」と、頷きながら四つの甲馬を取り出して腿に繋いで、さて著らに先立って越路を指して走りけり。
さる程に著は力寿と諸共に行き行って山城の深草の里まで来にける折に物欲しうなりしかば、すなわち力寿に由を告げて、その道の辺の煮売り酒屋に立ち寄って酒を飲まんと欲せしに、肴は皆これ川魚の鮒、泥鰌の類なり。著は元より仙術を行うにより魚肉を食べず、「精進物は無きや」と問うに、精進肴もありしかど皆売り果てし由なれば、たちまち望みを失って詮術も無く見えたるを力寿は「さこそ」と慰めて、
「私は今そこらへ出て、水菓子（果物）なりとも買うて来てん。それを肴にしたまえかし」と云いつつやがて忙わしく巷を指して立ちいでけり。かくて力寿は水菓子を尋ねてあちこち歩く程に、と見れば方辺の空き地にて人数多集まって石を持つのを見る者あり。力寿も好む技なれば、走ってそこに立ち寄って人をかき分けこれを見るに、年十八九ばかりなる一人の女が九十二貫目と彫りつけたる丸石を引き起こして肩にうち掛け、又、取り直して差し上げしを同じ技する男共が見つつ等しく肝を潰して、
「あの石は昔よりここに据え置くのみにして、持ちたる者を聞かざりしに、姉御にかかる力の有りしを今日まで知らずありけるぞや。さてもさても」とどよめいて、しばらく鳴りも止まざりしを力寿は片腹痛く思ってからからと笑いつつ、

「あればかりの石を差し上げたりとて、何程の事やはある。さても汚き持ち様かな」と云うを女は聞き咎め、石を投げ捨てきっと見て、
「その衒妻女は何処の者にて、飽くまで私を蔑みしたる。もしこの石を差すならば、汝に貸して▼持たせもせん。もし持つ事の得ならずば、その折は顎（あご）を張り歪め、再び口を聞かせぬぞ。さぁ持て、早く持たぬか」と息巻き猛く言い懲らせども力寿は騒ぐ気色も無く、
「あながまや☆、腹をな立てそ。覚えがなくて云うべきか、さらば手並みを見せんず」と進み寄りつつその石をいと軽やかに取り上げて、只これ手鞠をつく如く、或るいは高く或るいは低く、曲持ちをして見せければ、ここに集いし諸人は更なりその女は驚き呆れて言葉を改め手を揉んで、
「私は眼ありながら富士筑波の高きを知らず、ひどく無礼をしはべりぬ。願うは許したまえかし。なお申すべき事あれば私の宿所へ立ち寄りたまえ」と云うに力寿はちっとも否まず、引かれて彼女の宿所に到りぬ。
　かくて女は門の戸の閉ざしを開いて、うやうやしく力寿を上座に押し進め、身をへり下り額を突き、「類い稀なる御身の力量、由ある勇婦に御座すらめ。人の名を問う時はまず自ら姓名を告げると云う事あれば、烏滸がましくははべれども我が上を告げはべりてん。私の祖父は刀鍛冶にて入領して筑紫に居り、平家の世盛りなりし時は武家の御用を承って、家も豊かにはべりしを平家が滅び失せしより、我が家も衰えて、あちこちに放浪つつこの里に来て身罷りにき。それよりこの方、我が父はこの深草に侘び住まいして、小刀、包丁、鋏の類、萬刃物を造り鍛えて生業にしはべりしが、又、仕出したる事も無く、去ぬる年に二親ながらうち続いて世を去りにき。我が身は女にはべれども、親の家業を受け継いで刀、薙刀、鉾、鏃の軍器を造る秘伝を得たれども元手無ければ僅かなる刃物をのみ打ち出して、ひさぎて☆一人かくて居り。婿を仲立ちする者あれども私はをさをさ武芸を好んで力もいささか無きにあらねば、心に叶う婿も無く、世の人も又、忌みはばかって婿にならんと云う者稀なり。この故に里人らがなべて私をあだ名して日本莫邪柚花と呼びなしたり。願うは御身の姓名を知らせたまえ」と詳細にその身の上を打ち明けて、いと懇ろに請い問われたる力寿はつくづく聞きながら、
「さては御身は由諸ある人の息女にて有りけるよな。私は江鎮泊の勇婦にして旋風力寿なり。さしも御身は武芸を好んで力も人に優れながら、虚しくここにて老い朽ちんより小蝶、大箱の両刀自に従って三世姫に仕えたまえ。江鎮泊に行かんとならば私が手引きをしはべらん」と云うに柚花は喜んで、
「さては御身は世に名だたる旋風の刀自で御座せしか。私も予て彼の砦の群れに入らまくと思いしかども、知る人無ければ默止たり。▼願うは御身を姉として称えて共に力を尽くすべし」と云うに力寿も喜んで一議に及ばず義を結び、姉妹とぞとなえける。
　その時柚花は力寿に向かって、
「今宵はここに泊まりたまえ。終夜語り明かすべし」と云うを力寿は聞きながら、
「いかでかはさる暇あらん。その故は斯様斯様」と著の為に水菓子を求めにいでたる由を告げ、
「御身も彼処の酒屋に行って、指神子に対面したまえ。いざさぁさぁ」と急がすにぞ、柚花は聞いて、
「しからんには私が買い置きたる良き梨あり。これを携えたまえ」とて力寿に渡して諸共にその酒屋へ赴きけり。

その時著はいと遅く力寿が帰り来るを見て、
「和女郎は私を一人置き、何処へ行って道草を食ってかくまで遅かりしぞ」と叱れば力寿は頭を掻いて、
「腹立てたまうは無理ならねども、暇の要りしはいわくあり。その故は斯様斯様」と柚花の事の由を言葉短く説き示してすなわち彼女を引き会わせれば、著もこれに気色を直して三人やがて団欒をしつつ盃を巡らす程に、日は早西に傾きければ柚花は著、力寿をそのまま宿所へ誘って、夜食をすすめなどする程に著は柚花にうち向かい、今大箱は節柴を救わんとて越前の国府の城を攻めると云えども、城の大将綾重の幻術に挫かれて戦い難儀なるにより夏女、力寿を使いとして著を招き寄せる由をつまびらかに説き示して、
「夏女は由を大箱に知らせん為に先立って、早越前へ帰りたり。御身も我々と諸共に彼の陣中に赴いて、大箱の刀自、その余の勇婦に対面せまく思いたまえば、今宵の内に旅立ちの用意を早くしたまえ」と云うに柚花は喜んで、家具雑具を売り払い、家は借家でありければそのまま家主に返しなどしつ、只身一つなる心安さは事速やかに成し果てて、その明けの朝に著、力寿と共に深草を立ち去って越路を指して急ぐ程に、近江の坂本まで来にける時、夏女は著を迎えの為に又、彼の陣中より戻り来て著、力寿に告げる様、
「私は早く事の由を春雨の刀自に告げしかば、その喜び大方ならず。さてもその後彼の城内では大将綾重の矢傷も癒えて日に日に戦いを催せども、呉竹の刀自の軍議により味方は全て固く守って再び彼と鉾先を交えず、をさをさ御身の到着を皆つま立てて待ちて居り。いざ、さぁさぁ」と急がしてうち連れ立って行く程に、著はこの時柚花を早く夏女に引き合わし、力寿と共に事の由を斯様斯様と告げにけり。かくて又、著らは夏女と共に道を急いで越前の国府の陣中に着きしかば、大箱は呉竹らと等しく本陣に迎え入れて再会の喜びを述べて長途をねぎらいけり。
その時著は戦いの駆け引きを尋ねなどして、
「春雨の刀自、御心安かれ。綾重が邪術を施すとも、うち破らん事難からず。明日は必ず押し寄せて、一攻め攻めて試みたまえ」と云うに大箱その儀に任せて、次の日早く陣を移して手分けを定めて押し寄せたり。

○さる程に綾重は矢傷も既に平癒して、城より折々討って出て戦いを求めれども、大箱らは固く守って徒に日を送りしに、この日俄かに陣を移して押し寄せる由が聞こえしかば、大方ならず喜び勇んで、「奴等、己を知らずして、再びここへ押し寄せ来るはことわざに云う夏虫の火虫に似たる愚人ども。皆殺しにして▼くれんず」とて三千余りの人馬を揃えて、三百人の神兵を馬の左右に備えつつ、早城門を押し開かせ、まっしぐらに討っていでたるその中に先手の大将、手妻依世太夫長綱と名乗り掛けて、群がり立ったる寄せ手の陣へ面も振らず突いて掛かれば、左右へぱっとぞ退いたりける。その時寄せ手の陣よりも女弓取花的と名乗りつつ、しづしづと馬を進めて彼の長綱をさえぎり留めしばらく挑み戦いしが、花的わざと刃を引いて馬を跳ばして逃げ走るを長綱はなお逃さじとて後を慕って追いたりける。
その時花的は密かに刃を鞘に納めて、鞍に付けたる半弓を取るより早く引き絞り、矢声を掛けて「びゃう」と射る。長綱も又、眼早くて、その矢面に立ちながらもたちまちに身を沈まして鞍隠れをしてければ、矢は徒らに落ちてけり。花的はこの体たらくに安からず思いしかば、再び大刀を抜

きかざし、又、長綱と戦う事が五十余太刀に及びしかば、長綱はようやくに力衰え大刀筋乱れて叶うべくもあらざれば、逃げんとせしを花的は逃がしもやらず、振りひらめかす刃の光と諸共に水もたまらず長綱を馬より「だう」と斬って落とせば、「得たりや、おう」と寄せ手の大軍が鬨をどっと作りつつ、皆遅れじと討ってかかれば驚き騒ぐ城方の士卒は等しく備えを乱して討たれる者ぞ多かりける。その時綾重は恐れる色無く、馬上に剣を抜き持って口に呪文を唱えれば、空たちまちにかき曇り、砂礫を飛ばす風と共に異類異形の悪鬼猛獣が雲の内より現れ出て、勝ち誇りたる寄せ手の諸軍を駆け散らさんとうち向かう、時に著は馬上にて此の有様をきっと見て、しばし呪文を唱える程にかき曇りたる空は晴れて、猛獣悪鬼は一つも残らず風に木の葉の散る如く粉々として地に落ちるを寄せ手の兵が拾って見れば、皆これ紙にて作りたる鬼と獣にぞありける。

さては早綾重の幻術は破れたり。「やるな、余すな」と罵って、追っ取りまいて攻めたりければ、綾重は今更詮方無く、再び士卒を多く討たせてようやく城に入りしかば、寄せ手は一里退いてしばらく人馬を休めけり。

〇さる程に綾重は思わぬ今日の敗軍をいと口惜しく思いしかば、士卒を集えて下知する様、

「我が年頃学び得たる妙術に敵するものはあるべからずと思いしに、江鎮泊の奴どもに挫かれたるこそ安からね。いでや今宵は夜討ちして今日の恨みを返すべし。皆々早く用意をせよ」と▼息巻き猛く乗り示し、三百人の神兵と五百の兵を従えて、その夜丑三つの頃おいに寄せ手の陣へ押し寄せけり。

かかりし程に寄せ手の陣には呉竹は既にその機を察して、諸勇婦に心を得させて大箱、著と諸共に手分けを定めて待ちたりけるを、綾重は夢にも知らず寄せ手の陣に近づく程に、しばらく馬を乗り据えて、又、彼の呪文を唱えれば、黒雲起こって月を隠し、風又さっと吹き荒れて射干玉の闇になりけるを著は本陣に在りながら、この有様にちっとも騒がず、大空をうち仰ぎ、静かに呪文を唱えたる。奇特によって風静まり、雲たちどころに晴れ渡り、元の月夜になりしかば、綾重ひどく驚き慌てて、「さては敵にも備えあり。さぁ退け」と呼び張って引き返さんとする程に、等しく起こる寄せ手の伏せ勢はおっとり込めて攻めたりければ、綾重の士卒は度を失って討たれる者が少なからず。その中に彼の三百人の神兵は綾重を相助け、囲みを出んとしてけるを著は馬を乗り出して、手に宝剣をひらめかし、再び呪文を唱えしかば、神兵どもはたちまちに眼暗み度を失って、囲みを出る事叶わず、只うろうろと立ち迷い、一人も残らず討たれる。その隙に綾重は一方を切り抜けて逃げて城にぞ帰りける。

〇かくて次の日に寄せ手は又々押し寄せていとも厳しく攻めけれども、綾重は士卒に下知して命を限りに防ぎたる要害堅固の城なればさう無く攻めも落とされず、しかはあれども綾重は既に彼の三百人の神兵を始めとして兵を多く失い、幻術も再び三度と寄せ手の▼為に破られて施すべき謀り事無く、

「勢い既に極まりければ、この上は金ヶ崎、杣山、その余も隣郡の城々に急を告げて、その助けを得て相共に差し挟んで攻め討てば、たちまち寄せ手を斬り崩して大利を得ん事疑い無し」と思案をしつつ、夜にまぎれて城より騎馬の使いを出して隣郡へぞ遣わしける。その時寄せ手の軍兵は城より兵一両人が忍び出るのを見い出して、とく追いかけて討たんと云いしを呉竹は急に押し止め、

思うにあれは隣郡へ救いを求める使いなるべし。我も又、その謀り事に付いて一つの謀り事あり。只うち捨てて置きねかしと諭して遂にこれを追わせず、さて大箱に囁き告げて賤の砦へ人を遣わし、又、彼処より四五百の人馬を密かに呼び寄せけり。

かくて日頃を経る程に江鎮泊より新たに来ぬる彼の四五百人の兵は示し合わせし事なれば、寄せ手の陣へ近づかで進んで城へ入らんと欲する有様にもてなしけるを、寄せ手の陣よりこれを見て遮り留めて時移るまで追いつ返しつ戦いけり。

さる程に綾重は城の櫓にうち上り、この有様を遙かに見て、

「さては早、隣郡より助けの軍兵いで来たれり。今差し挟んで寄せ手を討たずば臍を噛むとも及ばんや。皆々いでよ」とまたたく隙に下知して馬を乗り出せば、直兜の兵四五百人が皆遅れじと討って出て、隊伍を乱しておめいて掛かれば、予て計りし寄せ手の軍兵は「江鎮泊より新たに来ぬる」と同士討ちを止め、一つになっておっとり込めて攻め立てる勢い当たるべうもあらざれば、綾重を始めとして城方の士卒は驚き騒いで、「此はいかに、おぞましや。隣郡よりいで来ぬる助けの勢にはあらずして、敵の謀り事に乗せられたり。皆退け」と罵って、右往左往に逃げ迷うを寄せ手の陣より秦名、花的、筒鳥、薄衣、数多の勇婦らが士卒を▼すすめてさえぎり止めて、ここに斬り伏せ彼処に討ち取り、只これ竹を割る如くに打ち靡けたりければ、城の軍兵は大方ならず枕を並べて討たれけり。

その隙に綾重は僅かに士卒を従えて辛くして囲みを切り抜けて、城に入らんと馬を跳ばして、早堀際まで乗り付けて、と見れば既に城中には寄せ手の旗を立て並べて、入れ代わりたる有様に思わずも又、「ぎょっ」として、

「さては城を落とされたり。今更に詮方無し。都へ上って亀菊殿にこれらの由を聞こえ上げ、再び戦を起こすべし。者ども続け」と呼び掛けて、馬の鼻面引き返す。かかる所に寄せ手の大将虎の尾の桜戸は手勢を進めて真一文字に綾重を遮り止めて、大薙刀をうち振りうち振り、当たるに任し薙たてれば、綾重の手の者は一人も残らず討たれけり。

しかれども綾重は一人ようやく切り抜けて、又、五六町走る程に追っかけ来る寄せ手の大将直蔦の稲妻は雑兵数多を従えて、隙間も無く追っ掛けたり。綾重は勢い極まって逃れ難しと思いしかば、呪文を唱え雲を起こして逃れ去らんとしてけるを著は小高き所に登って四方に眼を配りつつ、今綾重が術をもて逃れんとせしをきっと見て、手に宝剣を抜き持って、そなたに向かって斬り払えば、綾重またまた邪術破れて起こせし雲に乗ること得ならず、たちまち「だう」と落ちる所を稲妻すかさず手鉾をもて背を「ぐさ」と刺し貫いて首を取ってぞ差し上げる。

今この事の体たらくにいよいよ勇む寄せ手の勝ち鬨は天地も共に鳴り渡り、いとおびただしく聞こえけり。さる程に大箱は諸々の勇婦と共に静かに城にうち入って、札を出して民を哀れみ、又、城内に蓄えたる米を散らし銭を散らして、普く民にこれを施し、人を牢屋へ遣わして、節柴を迎えんとするに牢屋に居らずと聞こえしかば、大箱は深くいぶかって獄卒らに尋ねるに、獄卒らは言葉等しく、

「節柴殿の存亡生死は我々も未だこれを知らず。慈善二と云う看守を召し寄せて問いたまえ。彼はその役義に似気無くをさをさ慈悲ある者なれば、罪人らあだ名して仏慈善二ととなえたり」と云うに大箱頷いて、時を移さず慈善二を呼び寄せて尋ねれば慈善二は答えてさん候、

「節柴の刀自の事は去ぬる頃に綾重が頭を刎よと云われしかども、彼の刀自はさしたる罪無し。し

ばしなりとも助けんと思いにければ偽って、節柴は病み患って命朝夕に迫りたり。あのまま置かせたまうとも死するに程はあるべからずと云いくろめて期を延ばせしに、三日以前に綾重が又拙者を召し寄せて節柴を殺せと云いしかば、拙老は答えて、節柴は今朝もう既に息絶えたれば死骸を取り捨て候いき」とさりげ無く欺きしが、後に知られん事を恐れて牢屋の辺の空井の内へ縄を吊って下ろしたり。今もなおつつが無きや否やは知らず候なり。又、彼の藤原の正名の側女は去ぬる日実に身罷りぬ。その余の者はつつが無し」と云うに大箱驚き憂いて、呉竹、薯らと共にその井の辺に行って見るに、空井戸なれども深き事はおよそ八九丈余りあり。▼

「誰か今、この井の底に至って節柴の刀自をいだすべき」と云う言葉未だ終らずに旋風力寿が進み出て、

「願うは私が此の井の底まで下って、彼の刀自を出しはべらん」と云うに大箱喜んで、

「節柴殿がかくなりしも元はそなたの業なれば、そなたの所望はその儀に叶えり。さぁさぁ」と急がして大きなる畚※に綱を付け、その綱に鈴を付け、力寿をその畚に乗せてぞ静かに空井へ下ろしける。

※畚（ふご）：①運搬用のかご。もっこ。②びく。釣った魚を入れるかご。

かくて力寿は底に至ってあちこちとかかぐるに、いと暗くして見え分かねども人の骸骨多くあり。底には水もいささかあって、その冷たき事は云うべうもあらず、やや節柴を探り当ててしきりにその名を呼びけるに絶えて答えもせざりしかば、綱を動かし鈴を鳴らして引かれて、やがて出て来つ。大箱に斯様斯様とありつるままを告げ知らせるを大箱聞いて、

「しからんにはそなた、又、井に入って、彼の刀自を畚にもって、そなたはしばし残って居よ。折瀧の刀自を出して後に再び畚を下ろすべし。その折に又、畚に乗って引かれて出て来よかし」と云うに力寿は心得て、再び井の底に下り来て、さて降り立って節柴を抱いて畚にうち乗せ、再び鈴を鳴らしにければ、人々喜んで引き上げ見るに、節柴は身の内冷えて僅かに息のみ通うにぞ、大箱驚き雑兵に下知して、この城中の医師を呼んで薬を求めて介抱に手を尽くせしかば、しばらくして節柴はようやくに心地着いて大箱らを見て救われたる喜びを述べにける。

　しかるに力寿は井の底にて畚が下がるを待ちけるに、久しくなるまでその事無ければ、一人しきりに苛立って、「笊よ、笊よ」と叫ぶにぞ、人皆ようやく心付き、重ねて畚を下ろしけり。かくて力寿はその畚に乗りつつ引かれて出て来て、濡れたるその身を拭いもあえず、大箱を睨まえて、

「御身は私を空井の底に捨て殺しにせん為か。一時ばかり笊をも下げず、かくまで惨き姉品は世に又、幾たりあるべきや」と▼恨めば大箱微笑んで、

「そなたの恨みは無理ならねども節柴殿の介抱に紛れてそなたを忘れたり。堪忍せよ」となだめれば人皆共に詫び事しつつ、果ては等しく笑いけり。

　かくて又、大箱は正名の側女の亡骸を尋ねて棺に納めさせ、近き寺院に遣わして懇ろにこれを葬り、並びに節柴と諸共に綾重に捕らわれて牢屋に在りし正名の家の奴婢らを落ち無く助け出し、そのまま節柴に従わせ、さて節柴をば養生の為に乗り物にうち乗せて賤の砦へ遣わしけり。

傾城水滸伝　第十二編ノ四　曲亭馬琴著　歌川国安画

　かくて又大箱は彼の慈善二を召し出して、節柴を助けたる志を誉めて一百両の金を取らせて年頃綾重に虐げられたる民を哀れんで漏らす事無く皆施して賑わしければ、城内城外の百姓らは皆大箱の徳を感じて喜びの声が巷に満ちけり。
　かくても年頃綾重が貪り蓄えたる金銀がなお宝蔵に多かりければ、大箱は軍用の為にその金銀と武具、兵糧を数多の馬に負わし人を付け、江鎮泊へ送り遣わし、その後もろもろの勇婦と共に静かに国府を退いて目出度く凱陣したりける。

〇さる程に小蝶らは大箱の凱陣を迎えんとて砦に残れる勇婦と共に湖水の港☆に立ち出て、相伴って帰り来つつ忠義堂に▼酒宴を設けて勝ち戦を寿き、諸勇婦らをねぎらって雑兵に到るまで功によって褒美を取らせ、全て賞罰を正しくす。皆これ三世姫上の賜物なる由を述べ伝えて私の恩とせず。この時折瀧の節柴は病気未だ怠り果てねど忠義堂に参会し、大箱その余の勇婦にも再び生きたる大恩の喜びをなん述べにける。さる程に力寿は柚花を小蝶らに引き会わせ、彼女の上を告げ知らせて夏女も又、烏有仙女の仙術を斯様斯様と物語りして、等しく笑い楽しみたる。
　その次の日に大箱は三世姫に見参して勝ち戦の由を聞こえ上げ、並びに著、節柴、柚花も姫上に拝謁して女将の数に加えらる。されば賤の砦は著の帰参のみならず、節柴、柚花二人を添えて、勢いいよいよ盛んなりければ、世の人なべて怖ぢ恐れて和漢に例あらじと云いけり。

〇さる程に綾重が討たれし事は早く都に聞こえしに、その手の士卒が逃れ来て、江鎮泊の大箱らが狼藉の事の趣を斯様斯様と落ちも無くつぶさに注進してければ、亀菊はひどく驚き怒って、
「江鎮泊の賊婦らに我が親類を討たれしこそ、返す返すも安からぬ」と一人しきりに息巻きしが、次の日事の便宜をもて本院後鳥羽上皇※にすなわち奏聞しつる様、
「君は早聞こし召されしか、近頃罪悪の賊婦らが元の将軍頼家の娘を取り立てて、賊が岳に砦を構え、隣郡隣郷をうちなびき、天意威☆を恐れ奉らずにあまつさえ越前の国府の城を攻めたりければ、国司足羽の綾重など討ち死にの者は少なからず。もしあのままに差し置く時は遂に腹心の憂いとならん。早とく討っ手の大将を遣わされ、その根を断って葉を枯らす、御計らいこそ肝要ならめ」と涙ぐみつつ申せしかば、上皇の宸襟☆安からず、しばらくして宣う様、
「そは許かせにはし難き事なり、六波羅へ詔して武士らに征伐させるべし」と只鷹揚に▼仰すれば亀菊は又、申す様、
「越前、近江は御領にて六波羅、鎌倉の下知を受けず、さるを今事あるに及んで武士に仰せ付けられれば、彼らはその功に誇って彼の地を横領致さんか。この儀も謀り難くはべり。又、只これらの故のみならず江鎮泊の賊婦の事は世に隠れ無くはべれども、六波羅よりも鎌倉よりも征伐の沙汰無きは元より女の事なれば討ち捨て置くともさばかりの災いになるべくもあらじ、且つは院の御領にはべれば詔を受けずして戦を起こすもさすがにて、知れども知らぬ面持ちしつつ年頃を過ぐせしならん。いと恐れある事にはべれど、愚意をもてする時は此の度の討っ手の大将は六波羅へも鎌倉へも必ず仰せ付けらるべからず。京家の者を召し出され、討たせたまえば御勢もいよいよ目出度く御座しますべし。さばれ北面の武士なんど、男を遣わしたまうに及ぶべからず。賊は残らず女に

はべれば、ここにも女武者頭の優れ者を選ませられ、そを大将にして討たしたまえば世に相応しくはべりてん。この儀を許させたまえかし」と賢しら立って奏しまつるを上皇つらつら聞こし召し、
「その儀は真にしかるべし。実に彼の賊らは女なるに、北面の武士をもて大将にして討たせれば、鶏を裂くに牛の刀を用いるに似て、過ぎたりとこそ人も云うらめ。その器に叶う女武者の頭たる者あれば、朕は必ず重く用いん。聞こえ上げよ」と仰すれば亀菊は喜んで奏する様、
「私が預かり奉る女武者の多かる中にも、紀の芍薬に増す者無し。彼女は北面の侍なりし紀の有季の娘にて武芸の早技世の常ならず、力も力士に異ならねば重さ十二三斤ある六角の鉄の鞭二つを馬上にあって使うをもて、世の人は彼女を相称え二つ鞭の芍薬と呼びなしはべり。親有季もその母も先に身罷りはべりしが、家を継ぐべき男の子無し。彼の芍薬は女なれども親の家業を受け継いでお役に立つべき者なれば、去ぬる年に召し出されて女武者の頭たり。用いさせたまわれれば、功を立つべき者にはべり」と申せば、上皇は頷きたまいて、
「その女こそ宜しかるらめ。さぁさぁ召せ」とぞ仰せける。

※後鳥羽上皇：治承４（1180）-延応１（1239）鎌倉前期の天皇。高倉天皇の子。

〇かくて芍薬は上皇を拝し奉って江鎮泊の三世姫、並びに小蝶、大箱らを誅伐の詔を承り、あまつさえ左馬領※に▼飼い置かせたまいたる「白根の雪」と云う名馬を賜り、
「汝、この馬にうち乗ってその賊婦を討ち平らげ、早く大功を奏すべし」と仰せ下されたりければ、芍薬は謹んで天恩を謝して奉り、さて退いて亀菊の局に至って院宣の喜びを述べしかば、亀菊やがて対面して、
「此の度、賊婦を御征伐につき、五畿内の御領より軍兵多く召し寄せらる。和女郎は宜しく引率して、早く出陣したまえかし」と云えば芍薬うやうやしく額突きたる頭をもたげて、
「不肖の私が思い掛け無く、大事の御使いを承りはべりし事は只これ厚き御推挙のお陰によれるものにしはべれば、力を尽くし骨を折るとも必ず彼の賊婦らを皆殺しにして、賊が岳を掃き清めはべるべし。さばれ助けの大将なくては敵に望んで不便にはべらん。願うは御所の女武者の韓藍、沢蟹の両人を副将と成したまわれば、萬に一つも過ちあらじ。この儀を奏聞あれかし」と云うに亀菊頷いて、
「云われる趣は道理なり。我ら宜しく計らうべし」と答えて、又、次の日に件の事の趣を上皇に聞こえ上げて御許しを受けたりければ、亀菊は韓藍と沢蟹を召し寄せて院宣の由を伝え、又、芍薬にもしかじかと伝えて心を得させけり。
　とかくする程に早近国の軍兵五千余人が既に上洛したりしかば、亀菊はやがてこの軍兵を芍薬に授けて、軍陣の駆け引きを習わせ、武具、馬具は事如く兵庫に収め置かれしを取り出させて渡すにぞ、芍薬はなお武具、馬具に好みあり。それも程無く調いければ芍薬、韓藍、沢蟹の三女将は亀菊に出陣の由を告げて隊伍を調え、五千の人馬を引率して近江路を指して進発す。その事の体たらくはいと目覚ましく見えにけり。

※左馬寮（さまりょう）：馬寮（めりよう）の一つ。衛府に属し右馬寮とともに御所の馬屋の馬・馬具などをつかさどった役所。

〇さる程に賤の砦に都の方に遣わし置いたる忍びの雑兵が帰り来て、此の度亀菊の執奏により、女武者頭の二つ鞭芍薬に韓藍、沢蟹と云う二人の女武者を添えられて、この砦を討たしめられる

その勢およそ五六千人が湖水を指して寄せ来る由を早く注進してければ、小蝶、大箱は驚いて諸々の勇婦らを衆議廳に招き集えて共に軍議を凝らしけり。

その時軍師呉竹が進み出て、

「私は予て聞いたる事あり。彼の二つ鞭芍薬は紀の有季の娘にて、武芸力量の聞こえあり。重さ十二三斤の鉄の鞭二つをよく使う者なりとぞ。また韓藍、沢蟹もその武芸は世の常ならず、韓藍は肥え太って身の丈が高ければ京童があだ名して相撲取草韓藍と呼びなしたり。又、沢蟹は赤ら顔にて反り目使いをする癖あれば、天目子沢蟹と呼ばれる者なり。その素生は知らねども両人共に遠国の采女にて二親は世を去りつつ都にははかばかしき親類もあらずと云えり。よしやその三女将に万夫不当の勇ありとても、何の恐れかはべるべき。始めは力を持って戦い、後には智をもて破るべし。無益の評議に日を送らんより、敵を迎える用意こそ肝要ならめ」と云いしが、小蝶、大箱はこの儀に任して早手分けをぞ定めける。かくて此の度も大箱を総大将にて、秦名を先陣とし、桜戸、花的を二陣とし、早蕨を三陣とす。各々の左右の備えに▼副将あり。力寿、山桃らを遊軍として弱からん方を助けしめ、二網、五井、七曲、横鯛、下貝、琴樋を水軍の大将としてその勢およそ三千余人が湖水を西へ船渡りして坂本に陣を取る。

かかりし程に討っ手の大将、芍薬、韓藍、沢蟹らの大軍も坂本近く押し寄せ来て、互いに人馬を進めつつ鼓を鳴らし、鬨の声を合わして鉾を交えるに、大将も又、馬乗り出して互いに罵る戦の広言、秦名は沢蟹と戦う事が五十余太刀に及べども未だ勝負を分かざりしかば、桜戸は見かねて大薙刀を振りひらめかして駆けんと進めば、芍薬もすかさず馬を飛ばして彼の鉄の二つの鞭にて桜戸をさえぎり止め、時移るまで戦うたるその隙に花的は韓藍と切っ先を交えて戦いたけなわなり。

いずれも劣らぬ勇婦と勇婦の秘術を尽くす憤激空戦☆。いつ果つべしとも見えざりしに、日は早西に沈みしかば敵も味方も鐘を鳴らして別れて本陣に退きけり。

〇かくてその次の日は東雲（あけぼの）※の頃よりして、両軍互いに寄せ合って入り乱れて戦う程に、芍薬は花的と戦い、後には又、秦名、桜戸と戦いしに、いずれも劣らぬ勇婦なれば遂に又、勝負を分かさず、▼その中に寄せ手の副将天目子沢蟹は年なお若き勇婦にあれば、ひたすら功を貪って一人まっ先に進みつつ、近づく敵を斬りなびけたる勢い当たるべくもあらざりしを花的が遙かにきっと見て、馬を馳せ寄せさえぎり止めて、しばらく挑み戦う程に大箱の陣よりして青海原胡沙丸が萌葱縅の厚鎧に五枚兜を猪首に着なし、二尺ハ寸ばかりなる逸物造りの大刀を横たえ、月毛の駒の太くたくましきに雲渦鞍置いて豊かにうち乗り、手綱かい繰り、辺りをにらんで好き敵もがなと思う折に今花的が沢蟹と戦いたけなわなるを見て、真一文字に走らせ来て近づくままに声を掛け、

「羨ましく候。花的の刀自、終日の戦いに御疲れもあるべきに、そ奴は我らに討たせたまえ」と云いつつ太刀を抜きかざし、早代わらんとしたりしかば花的は馬疲れたる折からなれば、その意に任して譲って馬を引き返す。されば又、胡沙丸は沢蟹と戦う事、五六十太刀に及べども、これも勝負を分かたねば沢蟹しきりに苛立っていよいよ鋭く戦いしを、胡沙丸はなおあしらって隙を見合わせ引き外し、大刀を納めて逃げ走るを沢蟹はなお逃さじとて飛ぶが如くに追っかけたる。間近くなりし時、胡沙丸は鞍に付けたる鍵縄を取り上げて、後ろ様に投げ掛けたる手練の手の内過たず、その縄たちまち沢蟹の項にくるくるとまとわるを切り開く暇もあればこそ、早胡沙丸に引き殴られて馬より「だう」と落ちければ、胡沙丸の手の雑兵らが幾人か走り来て、押さえて縄をぞ掛けにける。

かくて胡沙丸は生け捕りし沢蟹を引き立てさせて総大将の本陣に帰り来にければ、大箱は斜めならず喜んで、あえて又、沢蟹を殺さずに言葉を安らかにしていたわり慰め、そのまま船にうち乗せて江鎮泊へ遣わしけり。

さる程に寄せ手の副将の相撲取草韓藍はなお後陣にありけるが、沢蟹が敵の為に生け捕られたる由を聞きつつひどく驚き怒って、いざ沢蟹を取り返さんと連環馬の一手をもて、味方の戦を助け来て、既に戦い疲れた芍薬と入れ替わり、四方に当たり八面に薙ぎ散らして息をもくれず攻めたけければ、江鎮泊の先陣、後陣は思わずも乱れ騒いで討たれる者も少なからず。辛うじて皆退いて湖水の辺にたむろしつつ再び備えを立て直せしかば、韓藍も芍薬も長追いをせず退いて元の陣所へ帰りけり。

※東雲（しののめ）：東の空がわずかに明るくなる頃。夜明け方。あけぼの。

〇されば又、大箱は

「今日終日の戦いに沢蟹を生け捕って、その利あるに似たれども、彼の連環馬に駆け悩まされて数多の雑兵を討たせしかば心の内は安からず、その夜諸々の勇婦を集えて、寄せ手に連環馬の備えがあれば明日の戦い難儀なるべし。力寿、山桃の両人は五百余りの雑兵を従えて、湖水に近き林の内に伏し隠れて機変をうかがい、敵もしそこらに到る事あれば不意に起こって討ち破るべし。この余二網姉妹、横鯛、下貝、琴樋ら、全て船手の大将も船を調え油断無く機に望み変に応じて、掛け引き専要なるべし」とおごそかに宣り示せば、皆々異議無く心を得てその手その手を守りけり。

かくてその夜の明けるに及んで、大箱は昨日の如くに諸勇婦を五手に備えて、いでて切所（要害）※に待ち受けたり。さる程に討っ手の大将二つ鞭▼芍薬は副将の韓藍と二手に分かれ、三組三千匹の連環馬を真っ先に進めて寄せたりける。そもそもこの連環馬は世の常なる馬面馬具足と同じからず、牛の襟皮五六枚を重ねて緘たる物を皆こと如く馬に着せて、上には又、馬線☆の如き鎖を一面に掛けたれば、他に表われる物とては馬の眼と蹄のみ。その堅きこと巌の如く、射れども突けども裏掻ず、馬はいずれも丈高く力強きを選みしに、着せたる具足はこと如く皮なるをもて重からず、これに乗る兵も身に隙間も無く厳しく鎧って鉄の喉頸当てに只眼をのみ表わしたれば、これも又、巌の如く、矢石、剣戟☆と云うとも、又、これを犯す事叶わず。されば此の連環馬を三匹づつ繋ぎ合わして一隊に相連ね、先には鉾持つ兵を進め、次には弓の手の兵ら、いずれも馬上の達者を選んで駆け引きを自由にす。只進むには速やかなれども退くに便利ならざるのみ。大箱の陣中にも紡車軍の備えありと云えども、此の芍薬の連環馬には敵すべくも見えざりけり。

※切所（せっしょ）：峠などの難所。また、要害の場所。 ※矢石（しせき）：矢と石弓の石。転じて、戦争。

※剣戟（けんげき）：①つるぎとほこ。刀などの武器のこと。② 刀剣による戦い。

［作者曰］水滸伝の呼延灼の連環馬はその図水滸四伝全書並びに世に李卓吾本と唱える略文の唐本に現れたれども、皆細画なれば、そのつぶさなるを見るに足らず、畢竟著作者の空言よりいでたれば、その図ありと云うとも又、これ影を捉える類いなる物なり。按ずるに三国志演義の赤壁の戦いに曹操が戦船を繋ぎ合わせたりけるを連環船と云う事あり。水滸伝の作者はこれによって船を馬に造り変え、連環馬と名付けしなり。我は近頃水滸訳評の一書を著さんと思えども、未ださる暇を得ず、もし□日その書を綴るに及ばば、ここらの評も詳しくすべし。

［又曰］水滸伝五十四回より下、招安の段に到るまで戦の物語り続いたり。戦いの事なりとて謀り事あれば面白からぬにあらねども、およそかくの如き合巻の絵双紙は一丁毎に描き著すをもて、さては絵組みに同じ様なる事重なって、いと成し難き所多かり。これらは見る人の心付かざる作者の大困りの場所なり。読み本は挿し絵なれば文をもて、ともかくも綴るとならば綴りもせん。合巻は文を略して画を▼旨と成すものなるに、戦いの段が続くに至って、一つ一つには描き難く、よしや描きたりとても、既に右に云える如くに同じ姿が多くなってはなかなかに五月蠅し。さればとて戦いの段を省いては見る人は明かぬ心地して、漏らしにけりと云われやせん。とにもかくにも短き本には最も手取りものなるを好める人に知らせんとて、繰り言ながら付けて云うのみ。

〇かくて大箱は近づく寄せ手を望み見るに、多くは皆彼の連環馬にて野にも山にも満ち満ちたる勢いあたるべうもあらざれば、心密かに危ぶんで難儀ならんと思えども、今更引くべき道が無ければ、諸勢を進めて戦ったる江鎮泊の勇婦らはかくても臆せし気色無く、秦名、桜戸、花的、早蕨、杣木、真弓、大鳥、涼風、彩雲、黄葉、岩飛葉、夏楊、胡沙丸、新玉、紺太郎らに到るまで、死力を尽くし手を砕き、うち破らんとて戦えども寄せ手の連環馬は強くして、射れども突けども物ともせざれば心ならずも戦い疲れて、又、総崩れに駆け散らされて湖辺を指して逃げ走るを寄せ手の大将芍薬、韓藍は「汚し返せ」と呼び掛け呼び掛け、隙間も無く追うたりければ大箱は肝を冷やして逃げんとするに馬疲れて逃れ難くぞ見えたりける。

かかる所に予ねてより林の内に隠れたる力寿、山桃の五百の伏せ勢は鬨をどっと作り掛け、追い来る敵の真ん中へ討って出て、さえぎり留めて、しばらく挑み戦う程に大箱を始めとして味方の勇婦ら死を免れて、そのまま船にうち乗りうち乗り、鴎が岡まで退くにぞ、芍薬も又、重ねて追わず、敵に伏せ勢あるを見て、やがて戦を収めけり。

〇されば大箱はこの日の戦に雑兵四五百人を失って、且つ馬、物具を落とせし事も幾ばくと云う数を知らず。しかれども幸いに味方の勇婦に討ち死に無し。その中に桜戸、稲妻、力寿、岩飛葉、早蕨の六人は敵の矢に当たって痛手を負いぬ。又、石竹、早潮、紺太郎、新玉らは余りにひどく敵に追われて船にも得乗らず陸を巡って逃げて江鎮泊に帰りけり。この故に大箱は鴎が岡の出丸に在って由を小蝶に告げしかば、小蝶はうち驚いて時を移さず、呉竹、著と諸共に鴎が岡の出丸に来て大箱らを問い慰め、「江鎮泊に退いて、人馬を休めたまえ」と云いしを大箱は聞かず頭を振って、「私自ら図らずして総大将を承り、この敗軍に及びしに、何の面目あって本営に帰り入るべき。なお此の所に留まって、重ねて敵を破るべし」と否みてその儀に従わず、手追いし六人の勇婦のみを賤の砦へ遣わして傷養生を致させければ、小蝶らは強いかねて別れて砦へ帰りけり。

〇さる程に芍薬は思いのままなる勝ち戦して、▼この日生け捕りたる雑兵弐百五十人あり。此の他武具、馬具、旗、差し物を得たる事は幾らと云う限りも無ければ喜ぶ事大方ならず、やがて目録に書き写してその事の趣を都へ相聞したりける。

かくて四五日を経て、都より男女川少将蓋成と云う雲の上人院使※として、芍薬の陣中に来臨あり。かたじけ無くも太上本院が此の度芍薬らの勝ち戦を誉めさせたまいて、御酒十樽砂金五百両、

並びに錦の鎧、直垂を下したまわりたりければ、芍薬はうやうやしく韓藍らと諸共に院使を迎えて院宣の趣を承って西に向かって拝し奉り、すなわち御賜の御酒、砂金を落ち無く士卒に分け与えて共に喜び勇みけり。

※上人（うえびと）：殿上の間に昇殿を許された者。殿上人。　※院使（いんし）：上皇の使者は院使、皇后のは皇后宮使と呼ばれる。

　かくて院使は別れを告げて都へ帰らんとせられし時に芍薬は願い申す様、
「大箱らの賊婦どもは逃げて鴎が岡の出丸に在り、これを攻めんと欲すれども湖水の船は皆賊婦の為に奪われたれば、容易く向かいへ渡し難かり。それのみならず彼の岸には葦葦水草繁り合い、兵を進めるに難儀なり。よって石火矢をもて彼処の出丸を討ち崩せば、重ねて進むに妨げ無かるべし。しかれども此の陣中にはさる飛び道具を蓄えず、且つ火術に鍛錬なる兵も候わず。よって思うに院の御所に召し置かれたる夕轟打出と云う女武者あり。彼女のその先祖は西洋の者にして、世々火術を伝えたり。父は近頃身罷って家を継ぐべき男の子無し。さればその打出の女は親の術を受け伝えて石火矢を放つに妙あり、武芸も又、世に優れたり。願うは打出を遣わされて石火矢をもて戦いを助けさせたまわれば、彼の出丸のみならず賊の古巣を踏み破り、宸襟を安め奉らん。この儀を宜しく御沙汰をもて、典侍（亀菊を云う）へ取りなしを一重に願い奉る」と述べてその意を告げしかば、蓋成朝臣は心を得て、都に帰って斯様斯様と亀菊に伝えけり。これにより亀菊はやがて打出を召し寄せて、芍薬の願いの趣を斯様斯様と説き示し、「早く彼の陣に赴いて、家に伝えし石火矢をもて戦いを助くべし」といとおごそかに下知するにぞ、打出はすなわち事受けして、退いて用意しつ、石火矢の筒と台までも数を揃えて火薬と共に数多の夫役に担わしつつ供人を従えて都を出て、幾日もあらずに早く芍薬の陣に来にければ、芍薬は喜び対面してしばらく軍議を凝らしけり。

〇かかりし程に大箱の忍びの者が出丸に帰り来て告げる様、
「此の度又、都より夕轟打出と云う女武者がその家に伝えたる石火矢、火薬を多くもて来て、水を隔ててこの出丸を討ち破らんと用意せり。御用心候えかし」と云うに大箱驚いて、
「しからんにはうかうかとここに在らんは危うかるべし。山の砦に▼退いて、又、詮方もあるべきにとて、諸勇婦と諸共に早く出丸を退いて賤の砦へすぼまりければ、今はしも此の出丸には人一人も居らずなりにけり。されば又、打出は三百余人の兵を従えて湖の岸に出張りしつ、鴎が岡とさし渡し、一里半ばかりなる岸の辺に石火矢の台を据え、筒を載せ、用意早くも整いたる。
　この石火矢には三種あり。第一を風火砲と名付け、第二を金輪砲と呼びなし、第三を子母砲と云う。さればこれらの石火矢をもて、およそ八九拾町あなたなる敵を討つに当たらずと云う事無し。この時世に石火矢は未だ在らざる物なるを只打出のみ故あって、その家に伝えたり。かくて打出は出丸を望んでその石火矢を放ちけるに、天地も等しく震動して、一つは水中に落ちたれども、その次なるは過たずに出丸を微塵に砕きけり。

〇さる程に大箱は賤の砦に帰り来て、打出の石火矢の事の由を小蝶らに告げ知らせ、いと憂わしき面持なるを呉竹は「さこそ」と慰めて、
「勝つも負けるも時運によれば、必ずな憂いたまいそ。まず謀り事をもてその打出を虜にして、すすめて味方と成す時は石火矢も我が物なり。かくて芍薬を破るべし。さわとてやがて、二網姉妹、

横鯛、下貝、琴樋らを招き寄せて謀り事を囁き示せば、皆々等しくその意を得て、既に用意をしたりける。

かくてまず横鯛、下貝は二三十艘の船を浮かべて、その船毎に兵は一両人の他を乗せずに向かいの岸へ漕ぎ渡し、打出が並べ置きたりける石火矢の筒を引き下ろし、台を微塵に砕きけり。この時打出は二三町、岸を離れてたむろして休らって在りけるに、只今敵の狼藉を見るに得耐えず三百余人の兵を進め走り来て、どっとおめいて駆け散らせば、横鯛、下貝らは立つ足も無く驚きたる体にもてなし、僅かに四五艘の船に飛び乗り、櫓を押し切り逃げて行くを打出はなおも逃さじとて敵の捨てたる数多の船にうち乗りうち乗り追っかけたり。

その時五井、下貝は数多の戦船を漕ぎ連ね、進む打出をさえぎり留めて、しばらく挑み戦う程に、打出らが乗りたる船は皆たちまちに水漏れて、詮方も無く見えにけり。これ呉竹が謀り事にて、その船底には一両人の兵を隠し置きたれば、今戦いの折に望んでその者どもは▼船に挿したる栓を手に手に引き抜いて、板子を跳ね上げ現れ出て、刀を抜いて斬り掛かる。これすら不慮の事なるに、船にはいよいよ水満ちて、皆波底に沈みけり。その時水中に人あって、打出が水に溺れるをかい掴み引き担ぎ味方の船に投げ上げしを七曲、下貝は両人して押さえて縄を掛けにけり。

今水中に隠れ居て、打出を容易く捕らえしは大歳間二網なり。されば打出の三百余人の兵も五井、横鯛、下貝らに生け捕られ、溺れて死するも多かりけり。芍薬はこれらの由を聞くと等しく馬乗り出して、打出を救わんと欲せしかども、早時移って敵も無ければ湖水を睨んで立ったりける。

＜翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三　禁転載　底本／早稲田大学図書館所蔵資料＞